

内村鑑三における「内と外」の論理^①

原 島 正

序

本論は、内村鑑三の宗教思想を「内と外」の論理で、説明する試みである^②。西田幾多郎の指摘のように、「宗教は心霊上の事実である。哲学者が自己の体系の上から宗教を捏造すべきではない。哲学者はこの心霊上の事実を説明せなければならぬ。それには、先づ自己に、或程度にまで宗教心と云ふものを理解してゐなければならぬ^③。」本論は、必ずしも哲学者の立場での説明をめざしているものではないが、近代日本の特異なるキリスト者内村鑑三の宗教思想を全体として、その特色を明らかにしようとする。その解明に「内と外」という論理を用いてみようというのであるが、その論理で内村の宗教思想を整合しようとするのではない。まして一つの「教義学」を建立しようとするでもない。内村の書いたものを読むと、自己の信仰を表現するのに「内と外」の論理を用いているところが多い。そこで、自覚的に「内と外」の観点から、内村の宗教思想全体を再構成してみようというのが、本論の試みである^④。

こうした試み、すなわち内村の宗教思想をそれがどのようなものであれ論理として解明することは、内村の基督教信仰にふさわしいことではない、という批判が当然予想されるので、本論に入る前にいささかの「釈明」をしておこう。

内村によれば、「基督教は理論にあらずして事實なり、実験なり、理論のみを以て基督教を悟らんとするは理論のみを以て化学を研究せんとするが如く基督教の何物たるかを了解し能はざるなり。」（「理想的伝道師」一八九二年）⁽⁵⁾

こうした内村のキリスト教理解は、初期の時代から一貫している。内村の信仰は、〈事実の信仰〉であった。例えば、「予定」を問題にする場合も、予定の論理よりも、むしろ事実を示すことが大事であると述べる。⁽⁶⁾

このように、内村にあっては、「基督教は科学と同じように先づ第一に事実でありまして、然る後に論理」である。従って、どこまでも、事実優先であり、論理は二の次である。「基督教は論理を誇るよりも寧ろ事実を告げる。若し示すべき事実がなければ論理を語らない」と内村は主張する⁽⁷⁾。けれども、「示すべき事実があれば、論理を語る」と言えないだろうか。事実を無視して論理だけを求めることは、避けなければならぬ。しかし、事実には、その事実を説明するための論理が必ずあるはずである。勿論、〈事実の信仰〉は論理で説明し尽くされるものではない。説明できないものを説明しようとするのが、伝道だとすれば、内村の著作活動は伝道そのものだとさえ言えよう。その説明のためにはなんらかの、論理を必要とする。言葉での説明は、たとえ不十分であっても、論理的であることを条件とするからである。

本論は、内村の宗教思想には、「内と外」の論理が見出されるのではないか、という立場から、内村の宗教思想を解明しようとする。「内と外」の論理が果たして、内村の宗教思想の解明に充分なる意義を持つかどうかは、本論全

体から判断してもらふことにしよう。

一 「内と外」の論理 その一

内村における「内と外」の論理には一見矛盾した表現が見出される。ある箇所では「外でなく内」と主張し、別の箇所では「内でなく外」と主張する。そこでこの二つの主張がどのような文脈で述べられているかを見ていくことにしよう。

(一) 外でなく内の論理

この論理は、道徳と宗教の違いを明らかにする文脈に見出される。

「道徳は外を謹むにあり、信仰は内を充たすにあり、内部の欠乏を補ふに外部の裝飾を以てする、之を道徳と云ひ、内部の充実を以て外部の光沢を加ふ、之を信仰と云ふ、道徳は美ならざるにあらず、然れども信仰に生采あるに如かず、道徳は抑圧なり、信仰は放射なり、道徳は機械なり、信仰は生命なり、道徳は信仰の真似にして其一時代的用たるに過ぎず。」(「道徳と信仰」一九〇五年)⁽⁸⁾

このように、内科は信仰と道徳を「内と外」の違いとして、両者を対比する。そして信仰のもつ意義を明らかにする。さらに、境遇も外なるものとして、キリスト教と対比する。

「基督教は内九分にして外一分なり、内に大なるキリストの王国ありて、外に小なる此世の王国あり、外、時には幽暗と化する事あり、然れども内は益々光輝を放つて燦爛たり、基督教は信仰九分にして境遇一分なり、我等何ぞ今の教会信者に倣ひて現世的文明を以て境遇の改善をのみ維れ計らんや、我等は暗黒の裡に在るも能く内に楽みて

安全なるを得るなり。」(「内と外と」一九〇六年)⁽⁹⁾

このように、内村は「境遇の改善」をもっぱらの関心事とする当時の教会の在り方を批判し、「基督教は内九分に於て外一分なり」と、内なる世界の平安を説く。内村の方法は、先ず内を改造することであつた。社会改良も、内が改良されてはじめて達成される。聖書の研究に専念したのもそのためであつた。⁽¹⁰⁾

「最大の慈善は衣食住の改善ではない、神の言辭ことばの供給である、人を外より善くせんとするに非ずして、内より改めんとするに在る、……。」(「逆境と生命」一九一六年)⁽¹¹⁾

何故ならば、「信仰は衷より起る、外より起らず、神の靈に因て起る」からである。「信仰の性質」一九〇七年)つまり、内村にとって、信仰は神の靈の働きである。従つて実験なのである。そこで、信仰とは「主観的」であると言ふ。「主観的なるは信仰の特性なり、主観的なるの故を以て信仰を排斥する者は信仰其物を排斥する者なり。」(同書)⁽¹²⁾

以上、紹介したように内村は「外でなく内」の論理を用いて信仰の説明をしている。けれども、同じく信仰を説明するために、「内でなく外」の論理を用いるのである。

(二) 内でなく外の論理

内村は「外を看よ」と主張する。

「外を看よ、内を省る勿れ、日に三たび神を仰ぎ瞻みて己を省る勿れ、健康は蒼き空そら天てんにあり、清き空氣にあり、広闊極りなき神の恩恵にあり、狭き室内に臭氣多し、狭き胸裡に何の善きことあるなし、清風をして臭氣を排はしめよ、聖靈をして邪慾を斥けしめよ、戸を開いて外氣を入れよ、室内に蟄居せきこして其処そこに無益の工風を凝らして、小君子たら

んと努める勿れ、之に神の正義を入れて聖き宇宙の人となれよ」(「外を看よ」一九〇四年)⁽¹³⁾

道徳が、内省をもっぱらにするのに対して、キリスト教は、外に目を向ける。目の向け方が違うのである。

このことを、内村はアーモスト大学のシリー学長から学んだのである。

「内村、君は君の衷をのみ見るから可^がない。君は君の外を見なければいけない。何故己に省みる事を止めて十字架の上に君の罪を贖ひ給ひしイエスを仰ぎ瞻^あまないのか。」(「クリスマス夜話」私の信仰の先生」一九二五年)⁽¹⁴⁾

内村は、このシリー学長の忠告によって、靈魂は醒めたのであるが、その説明は内村なりに言い換えられていると考える。内村の信仰告白と言ってよいであろう。内村は、シリー学長から(自分の外なるキリスト)を示されたのである。「信^し仰^ぶは^し読^みん^で字^の如^くに^自己^以外^の者^を信^じ仰^ぐ事^である。」(「目の向け方」一九二六年)⁽¹⁵⁾

それでは、何故「内でなく外」なのであるうか。その理由は、内を省みても罪の自己しか見出せないからである。内に罪人なる自己を見出すが故に、外を仰ぐのである。外を仰ぐことで救われるのである。どこまでも外に救いの根拠を置くのである。

「我^の等^の罪^の赦^免の確^証は我^が衷^に在^るの^では^なく^して、我^が外^{なる}髑^髏山^上に立^てら^れし^十字^架に於^てある^ので^ある、我^が義^とせ^らる^も亦^同じ^である、是^れ亦^我が衷^の事^では^なく^して我^が外^の事^である。」(「信仰の強弱」一九一五年)⁽¹⁶⁾

そのことは聖化においても当てはまる。

「我れ未だ聖められざらん乎、我は唯十字架上のイエスを仰ぐべきである、イエスを我が義、我が聖と認めし以上は自省は我に無用である、我は神の恩恵を確かめんために我が臍^そを見^み詰^つむるの必要は更らに無いのである、上^を俯^む

いて十字架上のイエスを仰ぐべきである、下を瞰みて自己を探るべきではない、自己は何処までも罪の自己である、自己の探究其極はたにまで及ぶも我等は其内に罪の外何物をも発見することが出来ないのである。

実に聖まことめられんと欲する乎、自己を視る勿れ、自己を忘れよ、唯十字架上のイエスを仰あやむ瞻みよ、然さらば自みづから求めざるに自まづから聖まことめられるべし。」(同書)⁽¹⁷⁾

さらに、内村は「眞まことの信仰は客観的であつて主観的でない。我等の為に十字架に釘けられしイエスを仰ぎ見る事であつて、我等の罪に満ちたる自己を顧ることではない。『善なる者は我れ即ち我肉に居らざるを知る』とパウロは曰うた(ロマ書七章十八節)。」(「現代神学に就て」一九二四年)⁽¹⁸⁾

この主張は、先に紹介した内村の信仰の説明「主観的なるは信仰の特性なり、主観的なるの故を以て信仰を排斥する者は信仰其物を排斥する者なり」と明らかに矛盾している。どちらも信仰の説明なのである。

それでは、内村にとって、信仰は主観でもあり、客観でもあるのか、という問いが提起されよう。

そのことについて、内村は次のように述べている。

「我は主観せず、又客観せず、我は我が靈魂の救主なるイエスキリストを觀じ奉る、彼は我にあらず、故に彼を觀奉るは客観するなり、然れども彼は我が靈に宿り給ふ者なれば我は自我の如くに彼を感じ奉るなり、我はイエスキリストを觀じ奉りて、主観的にも、亦客観的にも我が神を押し奉るなり。」(「救主イエスキリスト」一九〇七年)⁽¹⁹⁾

イエス・キリストは、我にあらず。それ故に客観するのである。同時にイエス・キリストは我が靈に宿り、自我の如くに感じることが出来る。それ故に主観するのである。かくして、内村はイエス・キリストを通して神を客観的にも主観的にも拜する、と言うのである。

このことは、次のように言い換えることが出来る。

外なるキリストには客観する。内なるキリストには主観する。そのことを通して神を拝する。其の意味では、信仰は、どこまでも主観的であり、同時に客観的なのである。その場合、私たちが信ずるのはイエス・キリストであるからして、この文章の冒頭に述べられているように「我は主観せず、又客観せず」なのである。

大切なのは、イエス・キリストを「観じ奉る」ことであって、主観か客観かはその信仰の説明として言われるのである。内か外かに関しても同様である。内か外かをあれかこれかで述べると同時に、内村は「内と外」として信仰を説明するのである。そこで、次に「内であり亦外である」の論理を紹介しよう。

(三)内と外の論理

内村は天に召される前年一九二九年十一月二十日に「預言研究の必要」と題する文章を書いている。この文章は一九三〇年に遺稿として発表されたのであるが、その冒頭「信仰は内であり亦外である」と述べている。

「信仰は内であり亦外である。眼に見ゆる外なる物の証明に併せて眼に見えざる内なる霊の承認ありて確乎動かざる信仰があるのである。信仰は内に限られて神秘化し、夢の如きものと成りて消え易くある。又外に限られて浅薄になり、政治経済と類を同うし、此世の勢力と化するの虞れがある。信仰も亦健全なる身体の如くに二本の足に立たねばならぬ。外なる歴史と天然と、内なる確信と道義の上に立たねばならぬ。」(「預言研究の必要」一九三〇年)²⁰

内村によれば、信仰は内なる確信に関わるだけでなく、外なる事実—具体的には天然と歴史の事実に関わるのである。その天然とは「神が造り給ひし万物の総称」であり、歴史とは「神がその聖意を行ひ給う道筋」である。そして預言とは、その神の聖意を明らかにすることである。それ故に預言研究が信仰には不可欠なのである。

内村の文章を引用しよう。

「……健全なる信仰に内外の両面がある。内に信じ又外を信するのである。而して又、外にも亦両面がある、天然と歴史とである。天然は神が造り給ひし万物の総称である。歴史は神が其聖意を行ひ給ふ道筋である。天地万物と日々^{○○○○}の出来事、信仰は之に関連する者であり、之を以て養はれ、強められ、導かるゝ者である。神は無智なる牧師伝道師の如くに、唯信ぜよと言ひて、信仰のみを以て我等に迫り給はない。天を指し、地を示して、世界人類の成行に徴して我等に信仰を勧め給ふ。クリスチャンの信仰は信仰のみの信仰ではない、大宇宙大世界を参考にして立つ信仰である。」(「同書」²¹)

内村は、一八八五年八月十日付けの新島襄あての書簡(英文)で次のように記している。

「小生は過去三、四年間思考をめぐらして来た自分の神学を完成したいと願ってます。(かかる傍若無人の言葉をお許し下さい。)小生には聖書は、聖三位一体とは別の一つの三位一体―人と、天然と、聖書自体との三位一体を具現しているように思われます。」²²

内村にとっての聖書は、聖書・天然・歴史の三者であった。「聖書は一書でない三書である。聖書と天然と歴史である。」(「預言研究の必要」²³)その三者は、父・子・聖霊の三位一体とは別の三位一体を具現している。このように、内村は若き日から考えていたのである。

「我は聖書と天然と歴史とを究めんかな、而かして是等三者の上に我が信仰の基礎を定めんかな、神の奥義と天然の事実と人類の実験、……我が信仰を是等三足の上に築いて我に誤謬なからん乎」(「信仰の鼎足」一九〇三年)²⁴

内村は、このように自己の信仰を外なる事実である天然と歴史にその基礎を置くのであるが、決して内なる事実を

無視するのではない。どこまでも内なる事実を究めると同時に、外なる事実によってその信仰を深め、確固たるものにするのである。⁽²⁵⁾ そのためにも、預言研究が必要であるというのが、内村の主張である。それは内村が聖書・歴史・天然に神の御業が示されると考えたからである。そして、その背景には、「救済は人の心霊にのみ限らない、彼の肉体、社会国家、全世界、全宇宙にまで及ぶべきなのである。」(「祈禱の範圍 最善の賜物」一九一五年)⁽²⁶⁾ という、全体論思考があつたことを忘れてはならない。

内村は基督者の望みである主の再臨には、深い理由があるとし、次のように述べる。

「第一に聖書之を明示し、第二に我靈之に応答し、第三に天然之に賛同し、第四に歴史之を説明するのである、神の真理である以上は局部的真理に非ずして全般的真理であるべき筈である。」(「望の理由」一九一八年)⁽²⁷⁾

内村はこの全般的真理、聖書・歴史・天然に関わる真理を問題としたのである。従って、内村の信仰が開かれたものであり、天然と歴史の出来事にあれだけ関心を示したのも、神の真理を全般的であるとしたことに由来したことが、判るのである。そして、そのことは「信仰は内であり亦外である」という表現によく示されている、と言えよう。

ところで、以上述べたように内村の「内と外」の論理は、彼の宗教思想が天然と歴史へと開かれたものであることを示しているが、同時にキリストへと集中していくものでもあることを見落としてはならない。内村にあっては、キリストへの集中と、天然と歴史への開けがともに、「内と外」の論理で説明されているのである。そのことは、内村の天然観、歴史観(当然聖書観も含めて)が、彼のキリスト論とその論理において対応していることの証しである。そこで、次に内村のキリスト論を「内と外」の論理から明らかにしよう。

二 「内と外」の論理 その二

(一) 外なるキリスト(我々の外なる出来事としての十字架)

前節で述べたように、内村にとっての救いは私たちの中にはなく、外なるキリストにあった。

「我が義は我が外に在り、十字架に釘けられし神の子に於て在り。我が内に於てあらず。我は己を省みる時に墮落し、キリストを仰ぎ瞻る時に向上する。自分で自分を責むる程愚かなる事はない。自分が義であり得やう筈はない。自分は生れながらにして、而して今尚ほ不義である。我が義は我れならざるキリストに於て在る。」

〔日々の生涯〕 一九二四(大正十三年)八月十一日⁽²⁸⁾

内村にとって、十字架による罪の贖いは、我々の外なる出来事として、既成の事実である。その意味では、過去の事実である。しかしながら、その外なるキリストは、内なるキリストである聖霊として私たちの内に宿り給うのである。そこで、次に内なるキリストとしての聖霊について内村の信仰を紹介しよう。

(二) 内なるキリスト(我々の内なる出来事としての聖霊)

内村は聖霊について、次のように述べている。

「聖霊は現在の事実である、聖霊に由りて基督教は単に過去又は未来の事にあらずして、現在目下の事となるのである。」(「我が衷なるキリスト」一九二一年)⁽²⁹⁾

聖霊が現在の事実であることは、何を意味するのであろうか。内村は〈神人一体〉を説く⁽³⁰⁾。すなわち、キリストの霊と人の霊とが一つとなるため、我が内にキリストが働き給うのである。救いの完成も内に聖霊が働くことで成就す

る。ロマ書八章の主題はそのことであるとして、次のように述べている。

「神は内外より我等を救ひ給ふのである、外に神の御業を示して我等を救ふこと―之れ『羅馬書』第七章までの主題である、内に聖霊を働かしめて我等の救いを完成すること―之れ第八章の主題である。」

〔『羅馬書の研究』一九二二年〕⁽³¹⁾

さらに、内村は「我とキリスト」との関係について次のように述べている。

「キリストの如く成るにあらず、キリストと成るなり、其手となり、足となるなり、我は己に死してキリストを我に在りて活かしむるなり、然らば我は欲せざるもキリストの如く成らざるを得ず、我とキリストとの関係は道德的にあらず、生命的なり、キリストは我が教師にあらず、我が救主なり、我が生命なり、又我が復活なり。」

〔「我とキリスト」一九〇六年〕⁽³²⁾

このように「我とキリスト」との関係を生命として理解する背景には、内村が若き日以来親しんできた生物学の教養がある。内村は「基督教は生物学である」として次のように述べている。

「基督教は道義学に非ず、生物学なり、道徳を伝へて人を教へんとは為さずして、生命を供して彼を活かさんとする者なり、キリストは教師にあらず、生命なり。」〔『新生物学』一九〇五年〕⁽³³⁾

以上紹介した〈外なるキリスト〉と〈内なるキリスト〉は、再臨のキリストによって、一つになる。そこで、次に〈内と外なる出来事としての再臨〉についての内村の信仰を紹介しよう。

(三)内と外なるキリスト(内と外なる出来事としての再臨)

内村によれば、十字架を仰いでキリストを信じて義とせられる。さらに、キリストを信じて、聖霊に導かれて聖め

られる。そしてキリストを信じて再臨を待つことで贖われる。どこまでもキリスト中心である。キリストの十字架に始まった救いはキリストの再臨によって完成される³⁴。その再臨には、外的方面と内的方面がある。

「基督再臨には内外の二方面がある、……殊に黙示録に表はれたるものは外よりする再臨である、即ちキリストが上より此世に來臨して神に従ふ者に大恩恵を施し、神に逆ふ者を悉く鞠まげき給ふと云ふことである、そして其事は聖書に明記してあることにして、聖書を信する者は誰人と雖も拒否し得ざる大教理である、実に再臨とは神の子が天の万軍を率ゐ其榮光を以て此地に再び臨み來ると云ふことである、普通基督再臨として唱へらるゝことは重に之れである、即ち外的再臨である。」

けれども、キリストの再臨には他の方面がある。それは信者の心霊内に築かれる内的再臨である。

「……聖書は又再臨の他の方面について語るのである、是れ即ち内的再臨である、けだし基督再臨とは唯外的の出來事にあらずして信者の中に既に起れる靈の働きの外に現はるべきものである、換言すれば再臨には内外の両方面があつて、内なる方面は信者の心霊内に築かるゝものである、(中略)信者は聖書の權威に依て再臨を信するに止まらず己が衷に聖靈の証明を有して、内外両方面より再臨を窺ひ得るのである。」(「基督再臨の二方面」一九二〇年)³⁵
内村によれば、「健全なる再臨信仰は外よりの再臨と内なる靈的実験との二を合せた者でなくてはならぬ³⁶」

(「同書」)つまり、キリストの再臨によって、内と外は一つになり、救いは完成するのである。そして、その内的方面と外なる方面は互いに刺激しあつて、キリストへの信仰を深め、豊かにする。つまり、内なる靈の働きが、外なるキリストへの信仰に確かなる基礎を与える。さらに外なるキリストへの信仰によって、すなわち再臨のキリストを待ちの望むことによつて、聖靈はより豊かに働くことになる。いづれにしても、私たちの救いは、内と外となるキリスト

によって完成されるのである。⁽³⁷⁾

以上、内村の宗教思想を「内と外」の論理から再構成してみた。

結 論

本論には、なんらの結論はない。最後に内村の宗教思想には、西田哲学の〈終末論的平常底〉と相似たものがあることを指摘しておきたい。

「内と外」と題された次の文章を先ず紹介しよう。

「肉の事に就ては普通の人たれ、靈の事に就ては特別の人たれ、世が見ては普通の農夫たれ、普通の職工たれ、普通の商人たれ、然り、止むを得ざる場合に於ては普通の官吏たるも可なり、然れども神の眼より見ては此世の属たる勿れ、籍を天国に置く聖徒たれ、キリストと偕に歩む神の子たれ、外は他の人と異ならんと欲する勿れ、唯内に神の光を宿して暗き世に在て其暗黒を照らすべし、ナザレのイエスに鑑みよ、彼は身に木匠たじくに在ましまして靈は神の独子に在せり、処世の方向に迷ふ青年某に語りし所。」(「内と外」一九〇四年)⁽³⁸⁾

この文章は、再臨運動の十年以上前に発表されたものであるが、内村の宗教思想における日常性、ないしは普通であることの重視がよく示されている。内における信仰の深まりは、外にあっては、普通の人として日々の仕事に従事することの勧めとなるのである。

⁽³⁹⁾ このような内村の宗教思想と西田哲学の「終末論的平常底」との間には、共通するものがあるように思えるのである。「終末論的平常底」とは、内村の信仰に即して説明すれば、どこまでも終末論的でありながら、つまり、イエス

・キリストの再臨による私たちの救いの完成に希望を託して生きながらも、その生活が日常生活の軽視とならず、かえって、日常生活を終末における祝福の先取りとして受けとめることである。それが普通の人として生きよ、ということではないか。さらに内村が信仰とともに常識を「必要なるもの二つ」⁽⁴⁰⁾として重んじるのは、とかくすると、精神主義になり、非常識な信仰になりがちなことへの警告と言えよう。

西田の場合は、臨済録を引用して、「終末論的平常底」の立場を説明している。⁽⁴¹⁾ 内村の場合は、聖書の信仰に生きることが、普通の人となることへの勧めとなっている。このように西田と内村とは、その信仰の拠り所を異にしながらも、似た宗教理解となることは、とても興味深いことである。

「キリスト教と日本文化」を考えるひとつの示唆が与えられるのではないか。⁽⁴²⁾

註

(1) 本論文は、一九八八年三月三十一日明治学院大学で開催された日本基督教学会関東支部会での研究発表に加筆したものである。

(2) 本論文は、筆者の内村鑑三研究の中間報告である。従って、いまだ論文としてまとめていないところもあるが、これまで書いた論文に基づいて論述している。詳しい展開は次の拙稿を参照してほしい。

一、「〈研究フォーラム〉日本教会史—透谷・鑑三の場合」

『日本の神学』十五 一九七六年

二、「事実の信仰(下)—内村鑑三の根底にあるもの」

『内村鑑三研究』第六号 一九七六年

三、「事実の信仰(中)—内村鑑三の根底にあるもの」

『内村鑑三研究』第九号 一九七七年

四、「『救済史』と『世界史』の接点—内村鑑三の神学」

『内村鑑三研究』第十四号 一九八〇年

五、「内村鑑三と『身体の救い』」

『基督教学研究』第五号 一九八二年

六、「内村鑑三と西田哲学」

『日本プロテスタント史研究会報告』第十二号一九八四年

(3) 「場所的論理と宗教的世界観」『西田幾多郎全集』十一

巻 岩波書店 一九七九年第三版 三七一頁

(4) 「内と外」の観点からの宗教思想の分析として、次の論文がある。片柳俊子「ルターにおける『外』と『内』についての一考察」『基督教学研究』第二号 一九七九年

「内と外」は哲学の問題でもある。伊藤吉之助編輯『岩波哲学小辞典』増訂版一九五三年第一〇刷発行に叙述されている「Hito Sono 内と外」を引用しておこう。

「内外の別は或一定の限界を有する領域に対して初めて云ひ得る事であるから、その領域の異なるに従つて、内或は外とされるものが異なるのは当然である。例へば物質、自然の如き領域に就て云へば、その絶対的に内なるものは我々の経験には到達し得ず、我々の経験し得るのはただ外官の対象として即ち現象としてのいはば外的なるものにすぎない（カント）。故に内外の区別は必ずしも内在性と超越性の別に応ずるものではないが、心的現象、意識作用、主観などが物的現象、外的対象、客観等に比してより直接的領域と考えられるから、前者に属するものは内、後者に属するものは外となされ、従つて此場合には内在性と超越性の意味に近い。この場合でも次の如き色々の場合を含み得る。一）経験的心理的見地：此見地では凡ての意識現象は内なるもの、其対象たる時間空間的存在は外なるものである。併し此区別は常識に基づくものであるから理論的には曖昧である。二）論理的認識論的見地：内と外は此場合には屢主観、客観の対立として現はれ

内村鑑三における「内と外」の論理

る。此場合の主観を論理的に純化すれば認識主観の概念が生ずる。又内なるものを現象学に於ける純粹意識の如きものとして考へれば、之を超越する一切（時間空間的存在のみならず、純粹意識以外の本質一般）が外なるものとして対立する。」同書 九〇一頁

(5) 『内村鑑三全集』第一巻 岩波書店 一九八一年 二七二頁。以下『内村鑑三全集』からの引用は巻と頁だけで表示する。なお、傍点はことわらないかぎり、原文に付いているものである。

(6) 「予定の教義」一九〇四年 十二巻 一八二頁。

「問、：私は今より予定は信仰上の事実である乎、其事に就て伺いたく存じます。」

答、私は貴下が予定の論理よりは先づ其事実、に就て御尋ねになりました事を甚だ喜びます、何故となれば予定は基督教の他の教義と均しく、其事実を示すことは其論理を述ぶるよりも容易いからであります、基督教は科学と同じやうに先づ第一に事実でありまして、然る後に論理であります、然るに兎角理論好きの日本人は事実を探らないで先づ論理を究めんと欲します、是れ彼等の宗教研究なるものが常に墮胎に終る原因であると思ひます。」

(7) 「基督教は僅かに来世の存在を教ゆるに止まらない、基督教は単に来世は無くしてはならないとは云はない、基督教は

論理を語るよりも寧ろ事実を告げる、若し示すべき事実がなければ論理を語らない、他の事に就ても爾うである、来世存在問題に就ても爾うである。「基督教の来世観に関する明白なる事実」一九〇五年 十三卷 二七七頁

(8) 十三卷 一一八頁〜一一九頁

(9) 十四卷 一七六頁

(10) 「基督教徒と社会改良」一九〇一年を参照。九卷三三二頁〜三三七頁

内村は「若し人生の終局の目的なるものがあるならば、是は福音の宣伝であると思ふ。」と述べる。しかし、社会改良にも従事する、と言う、「社会改良は吾等の本職ではないが、然し吾等独特の仕事である、此世を重ぜざる基督信者が最も有力なる此世の改革者であるとは逆説の如くに聞えて実は最も著明なる事実である。」それでは、福音の宣伝と社会改良とはどのように結びつくのか。内村によれば「真正の改革は衷より始まる者であつて外より来るものではないから、社会改良と称して多くは外より為さんとする改革の到底永久的のものでない事は善く分つて居る。」けれども、「外よりするの改革も亦多くの場合に於ては内よりするの改革を助くるものであるから、仮令皮相の改革であると知りつゝも吾等は熱心に其実行を計るべきである。」ここに外から内の論理が示されている。逆に「内に聖い者は外にも亦た清からざるを得ない

い」のである。内から外への論理である。「吾等の靈魂と肉体とは二つ全く別物ではないから、靈魂が清まれば肉体も目づと潔まるのは当然である、故に基督信者が社会改良に熱心になるのは自然の勢いであつて、彼は敢て義務に強ひられて之を為さんとするのはなくて、彼の本性が彼をして之を為さざるを得ざらしむるのである。」

内村には靈魂と肉体との二元論はない。両者は相互に影響し合うのである。靈魂の救いは自ずと、肉体の救いへと導かれるのである。内村にあつては、内と外はどこまでも一つである。たとえ、それが希望に於いてであつても。

右記論文を発表した翌年の「第三回角筈夏期講談会」の開会にあつて、次のように述べている。

「今や改革の火の手は甚熾んですが要するに外面的求心的の姑息法であります、私共の求める改良法は求心的でなく遠心的でなくてはなりません。外面よりの改革でなく内側よりの改革でなくてはなりません、今の世に禁酒会といふが行はれて居りますが、成程酒盃のことは禁酒会の力でやめられるにしましても、人心根本の改良は区々たる人間の力、文部省の倫理教育を以て成功すべきものではありません。」十卷二七七頁

人間を根本から改革するものは聖書である、というのが内村の主張である。「…聖書の教ほど人々の良心を鋭敏くする

ものはありません、私共は文部省の倫理教育や仏教にその様な力があるとは夢にも信ずることが出来ません。」同巻二七八頁

小原信『内村鑑三の生涯』PHP研究所、一九九二年

二二二頁、二五五頁参照。

(11) 二三卷 七頁

(12) 十五卷 一五八頁 全文を引用しておく。

「信仰は先きに主観的にして後に客観的なり、先きに客観的にして後に主観的なるにあらず、信仰は衷より起る、外より起らず、神の靈に因て起る、人の証明に由て起らず、余輩は聖書が肉体の復活を伝ふればとて之を信せず、余輩の衷に肉体を復活せしむるに足るの能を確認するが故に此事に關する聖書の記事を信するなり、主観的たるは信仰の特性なり、主観的なるの故を以て信仰を排斥する者は信仰其物を排斥する者なり。」

(13) 十二卷 四二頁、四三頁

(14) 二九卷 三四三頁

(15) 三〇卷 四四頁

「基督信者は自己を顧る者ではない、目を自己以外の者に注ぐ者である。己が義又聖を己が内に持つ者にあらずして、己が外なるキリストに於て有つ者である。基督信者は自省者でない、仰瞻者である。目を挙げて十字架上の神の子を仰ぎ瞻

内村鑑三における「内と外」の論理

る者である。」(同書 同頁)

(16) 二二卷 二二〇頁

(17) 二二卷 二〇八頁、二〇九頁

(18) 二八卷 一六四頁

内村によれば「現代神学はイエスの人格並に内的生命を以て其の研究の主題とする。旧神学の如くに彼の受肉、復活、昇天、再臨等に注意しない。現代神学は其根本に於て主観的である。」そして「救拯とは主として自己意識より脱する事である。」その点では「外なる世界の實在を主張する唯物論は、自己意識の病的探求に没頭する現代神学に勝ること数等である。」と内村は考えている。

別のところで、次のように述べている。

「健全なる宗教は第一に主観的でなくして客観的である、内省的でなくして仰瞻的である、人は己が内を如何程探るとも其内に真善美を發見する事は出来ない、『善なる者は我れ即ち我肉に居らざるを知る』とパウロは曰ふた(ロマ書七章十八節)心の底を掘り尽すとも其所に神を看出す事は出来ない、『我』は何処までも罪の我である、『心は万物よりも偽はる者にして甚だ悪し』とあるが如し(エレミヤ記十七章九節)、心理の解剖精細を極むるとも之を以て神と真理とを織出す事は出来ない、神は我が外に在ます、我が衷に在まさない、我は彼が我が衷に探るを廢めて我が外に探るべきである、我が

義、我が聖、我が贖は十字架に釘けられしイエスに於て在る、其所に彼を仰瞻て我は我が求むる神を視、我が欲する平安を獲るのである、内省的宗教は不健全である、虚である、空である、勞多くして無益である、信仰の目的物を我れ以外、十字架上のキリストに於て求め得て我が希望は充たされ、我は新たなる力を獲て鷲の如く翼を張りて昇り、走れども疲れず、歩めども倦まざるに至る(イザヤ書四十章三節)。「健全なる宗教」(一九一九年八月二五卷 七四頁)

(19) 十五卷 十一頁

(20) 三三卷 三三八頁

(21) 三三卷 三三九頁

(22) 三六卷 一九二頁 原文は英語。訳文は教文館版『内村鑑三日記書簡全集』五一六七頁による。

原文を引用しておく。

“I have however a desire to complete my theology, which I have been thinking for the past 3 or 4 yrs. (Excuse me for such audacious words). To my mind the Bible looks like the embodiment of a trinity besides the Holy Trinity, I mean man, nature, and the Book itself.”

(23) 三三卷 三三九頁 内村の聖書観は別に論じる。

(24) 十一卷 二〇一頁

(25) 「今の基督信者は其實際的の信仰生涯に於て預言を頭みな

いのである。彼等は信仰は心の内の事であるとのみ思ひ、其強き証明を此世の出来事に於て見ない。聖書は明かに信仰養成の為に預言研究の必要欠くべからざるを説くに闕わらず、今日の信者全体は預言抜ききの聖書に由つて其信仰を養はんとしつゝある。」「預言研究の必要」三三卷 三四〇頁

(26) 二二卷 二三三頁

筆者の内村研究は自然科学者内村、社会思想家内村、聖書学者内村を全体として理解することをめざしている。それというのも、内村の宗教思想に聖書と天然と歴史を貫くものがあると考ふるからである。

(27) 二四卷 七八頁

(28) 三四卷 三三七頁〜三三八頁

(29) 二六卷 五〇五頁〜五〇六頁

(30) 「…『羅馬書』第七章までは神と人の關係を説き八章は神と人との合一を説いたものである、關係は關係だけで止まつては未完成である、この關係の發展するところ遂に合一、一致、融合にまで至らねばならぬ、そして此の合一は実に靈と靈の合一を以て起らねばならぬ、先づ靈と靈が合一すれば相互の最も深き所に於て合一したのである故、その他の合一も当然実現さるゝのである、そして神の靈はキリストの靈である、又聖靈である、この聖靈が信者の心に臨んでその靈と一致融合する時謂ゆる神人合一は実現せらるゝのである、之

を説きしものが第八章である。」

〔羅馬書の研究〕一九二二年〕二六卷 二八二頁

内村が「神人合体」について述べている文章を二つ引用しておこう。

「問、神の靈は如何にして意志即ち人の靈を感化するや。

答、直に人の靈に入りてなり。

問、靈が靈に入るとは如何なる事ぞ。

答、靈が靈に入るとは二つの靈が融合して一つの靈となることなり。

問、如斯き事は實際有り得る事か、又為し得る事か。

答、其為し得る事、有り得る事たるを吾等は吾等の実験に

依て知るなり。

問、其時の実験は如何なるものぞ。

答、其時吾等は自身非常に強くなりしを感ず、前に慕はしかりし者は今は憎むべき者となり、憎むべき者は愛すべき者となるなり、聖書に謂ふ所の「是故に人キリストに在るときは新たに造られたる者なり 旧は去て皆な新しくなるなり」とは此事を指して云ふなり。

更に云はんと欲す、神人合体とは斯かる事を指して謂ふならんと信ず、神と人との場合に於ては合体は合靈ならざるべからず、其は神は靈なれば彼は靈に於てのみ人と合同し得ればなり。」〔救靈問答〕一九〇二年〕十卷

内村鑑三における「内と外」の論理

三二六頁

「神はキリストに在りて人に臨み、人はキリストに在りて神に近づく、神人合体は今や詩人の夢想にあらず、人はキリストに由らずして神に到る能はず、神はキリストに於てのみ自己を顯はし給へり、キリストは天と地との接点なり、神と人との間に立つ中保者なり、キリストは途なり、罪の人が聖き神に到るの途なり、彼に在て我等は神の子供たるを得るなり、天に在す我等の父の完全きが如く、我等も完全なるを得るなり。」〔神人合体の事実〕一九〇五年〕十三卷 二六四頁～二六五頁

(31) 二六卷 二八一頁

内村の聖靈についての信仰は別に論じる予定である。ここでは、次の文章を紹介しておきたい。

「『風は己がまゝに吹く、汝其声を聞けども何処より来り何処へ往くを知らず、凡て靈に由て生まるゝ者は如此し』とある通りである(ヨハネ伝三章八節)。物には内外の別があるが靈には其別が無いのである。」「〔自力と他力〕一九二五年〕二九卷 二五三頁(傍点引用者)

(32) 十四卷 二四五頁

(33) 十三卷 二九頁 内村の生命観についての研究は今後の課題である。

(34) 「完全なる救拯」一九二〇年 内村によれば、「徹頭徹

尾信仰である。信仰に始まりて信仰に終る、之れ神の基督者より要求し給う唯一の態度唯一の条件である。此点に於て基督教の福音に法然親鸞の教えと酷似する所がある、彼等が我を救ひしは其信仰本位の單純なる福音に由てであつた、基督教の救拯も亦然り、」なのである。二五卷 二六〇頁〜二六一頁

(35) 二五卷 四九一頁〜四九二頁

(36) 二五卷 四九三頁

(37) 内村のキリスト論については、今後の課題としたいが、キリストは内であり外である。否、靈がそうであつたようにキリストにも内外の区別はないのである。なお、内村の終末思想については、別の論文で詳細に論じる。

(38) 十六卷 二七九頁

(39) 内村の宗教思想と西田哲学との共通性については、問題の指摘にとどめる。別の機会に論じる予定である。

(40) 「必要なるもの(其第一)は信仰である、信仰のない者には鞏固なる所がない、信仰は靈魂の生命である、是ありて詩もあれば熱望もあるのである、信仰なくして人世は一つの機械に過ぎない、詰らない、味の無い、意味のない者として、信仰のない生涯の如きはない。

必要なるもの(其第二)は常識である、常識なくしては折角の信仰も迷信と成り易くある、若し信仰は吾人の頭腦を雲の上

にまで引き上ぐる者であるならば、常識は吾人の歩程を地上に確かならしむるものである、信仰は吾人をして卑しき思想を懐かざらしめ、常識は吾人をして常道以外の事を信ぜらしむ、熱せしむるは信仰であつて、静かならしむるは常識である、信仰は善き心を生じ、常識は慧き思考を起す、信仰は精神であつて、常識は方法である、爾うして常識は信仰を實行するための唯一の方法である、世に恐るべき事として常識に由らずして信仰を實行せんとするが如きはない。」

「必要なるもの二つ(信仰と常識)」一九〇四年 十二卷 四三六頁

(41) 「臨濟は仏法無用功処、祇是平常無事、屙屎送尿、著衣喫飯、困來即臥、愚人笑我、智之知焉と云ふ。併しかゝる語も誤解してはならない。終末論的なる所、即ち平常底であるのである。」西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」『西田幾多郎全集』十一卷 四四六頁

(42) この問題に関して、内村がキリスト教、西田哲学が日本文化であるとして、兩者の親近性を考えようとしているのではない。内村の宗教思想がそこから生じてくるところと、西田哲学がそこから生じてくるところを、同じくする何かがあるということである。そのところを仮に鈴木大拙が言うところの「日本的靈性」と名付けておこう。筆者の内村研究の究極目的は、この「日本的靈性」を明らかにすることである。